

# 読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究（2）

## — 「つなぐ思考」の活性化—

### A Study of Methods and Techniques of Instruction for the Improvement of Reading-Comprehension Literacy (2)

#### — Activation of Logical Thinking —

次世代教育学部乳幼児教育学科

伊崎 一夫

ISAKI, Kazuo

Department of Early Childhood Education

Faculty of Education for Future Generations

**キーワード：**論理的思考力，新学習指導要領，小学校低学年，読解指導，絵本の読み聞かせ

**Abstract：** The purpose of the present study is to clarify the ideal way of how the "logical thinking" can be acquired in learning activity of an introductory period in "Read" area by means of effective methods and techniques of instruction. We can assume that the following points enable this aim to be successful: 1. To continue reading picture books to children and let them exchange their impressions, 2. To use the conjunctions that urge "logical thinking," and 3. To bring their own impressions together as "Favorite". In learning activities at the introductory period of "reading", they are supposed not only to enjoy stories and to describe their simple impressions but also to write their ideas logically based on the coherent reason. This study is characteristic of how the practical attempt could verify the technical betterment of teaching devices at the early period of "reading".

**Keywords：** Logical Thinking, New course of study, Elementary school lower classes, Comprehension guidance, Reading picture books

#### I 「読解力」「読書力」「表現力」を効果的に育む

##### （1）学習指導要領改訂の妥当性と必然性

OECDが行うPISA調査（OECD生徒の学習到達度調査）において、日本の読解力の平均得点は、2000年から2003年にかけて急落し、その後も低下傾向は続いている。得点低下の主な原因は、全問題の40%をしめる自由記述問題の無答率がOECD平均より8ポイント高いことにあると思われる。自由記述問題は、「根拠をあげて自分の意見を表現する」問題である。そこでは、論理的に思考し、論理的に記述する能力が必要となる。国語科は、自分の意見や考えを書くことができることを目指し、「書くこと」と「読むこと」領域の指導について、その質を転換せざるを得ない。

また、読解力は、読書力と相関する。読書には相応

の読解力が必要になるし、読解力は読書によって培われる。PISA調査における読解力が低得点だったことは、読書力の低さであるともいえる。事実、日本の高校生の読書量と読書意欲は、PISA調査参加国中最低である。読書力の強化が、読解力の向上につながる。読書教育もまた、その質の転換を求められている。

ところが、これまでの読解指導と読書教育の間には隔たりがあった。国語の授業では、深みをめざす読みは読解、広がりをめざす読みは読書と、分けてとらえられてきたからである。読書は、読解の後に発展学習として位置づけられることが多かった。

また、読書教育においては、その目的を、低学年は「楽しんで読書をしようとする」、中学年は「幅広く読書をしようとする」、高学年は「読書を通して、考えを広げたり、深めたりしようとする」と、発達段階に

即して設定されることが多かった。読書教育は読書態度を強調し、読解力の向上を積極的には求めてはこなかったともいえよう。

従って、2008年（平成20年）版の学習指導要領（以下、新学習指導要領と記述）における国語科は、読解と読書との関連指導をより積極的に行うように改訂された。例えば、低学年の言語活動例は、相対的に書く活動が強調され、次のように大きく変化している。

#### ○現行の学習指導要領における言語活動例

（第1学年及び第2学年）

- ・自分の読みたい本を探して読む
- ・読んだ本の中で興味を持ったところなどを紹介する

#### ○新学習指導要領における言語活動例

（第1学年及び第2学年「読むこと」領域）

- ・エ 物語や、科学的なことについて書いた本や文章を読んで、感想を書くこと
- ・オ 読んだ本について、好きなところを紹介すること

新学習指導要領の言語活動例の取り扱い方は、格上げされている。つまり、上記の言語活動例を通して「読むこと」領域の指導事項、例えば「ウ場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」「エ文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと」「オ文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと」などについて指導する、と改訂されたのである。PISA型「読解力」への対応を念頭に、「読むこと」領域の指導事項でありながら、書く活動が強調されているのである。

読書力にとって、読書への興味・関心・意欲は不可欠である。と同時に、前述したように、読書力は読解力に支えられている。たとえ低学年であっても、相応の読解力がなければ、読書できない。読書力と読解力は不可分の関係である。新学習指導要領の改訂には、妥当性と必然性がある。

## （2）「つなぐ思考」の強化と「考えること」

さらに、書くことは考えることである。考えることと書くことは深く連動している。具体的な根拠に基づき、自分の考えを主張する「表現力」を高めるためには、論理的思考力を強化しなければならない。PISA型「読解力」は、テキストの内容をよく理解した上で、テキストに基づいた根拠をあげ、テキストを評価・批判して自分の考えを述べることを要求する。論理的に思考し、論理的に記述する力を高めることは、PISA型「読解力」の強化に他ならない。

論理的に思考し、論理的に記述するためには、事象と事象とを関連づけ、そこに必然的な結びつきを見出す思考が求められる。それは情報を「つなぐ思考」である。「つなぐ思考」を強化することによって、論理的思考は活性化し、自分の考えを主張できる「表現力」へと結びつく。

国語科は言語の教育としての立場を重視する。そこから必然的に導かれる「言語能力」と「国語を尊重する態度」とを身につけさせるための「目標」と「内容」とが、国語科の不易の学習内容である。国語科の授業は、この能力と態度とを確実に身につけさせることをねらいとして展開される。「言語能力」である「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」のすべてには、「考えること」が内包されている。西尾実は「国語学習への実践的指標」において、次のように述べている。

つきつめていうと、話すことは考えることである。聞くことは考えることである。書くことは考えることである。読むことは考えることである。（中略）その意味で、国語教育は、話し・聞き・書き・読む働きに即した考えることの教育であるといつてよい。（『西尾実国語教育全集第7巻』、教育出版、P142、1975.10）

言語行為は必然的に関連し、その内実が充実していくための根本に「考えること」が位置付くという指摘である。中でも、「考えること」が直裁に求められ、可視化される言語行為は「書くこと」である。従って、本論では、「読解力」と「読書力」とを視野に入れつつ、「つなぐ思考」の強化を中核に据えた、論理的に記述する「表現力」の育成をめざしている。それは、「読解力」と「読書力」「表現力」の三つの力を同時に高めていく学習指導の工夫改善を行うことである。

## Ⅱ 読解力・読書力と連携した「つなぐ思考」の育成

### （1）読書カードの項目における論理性

ところで、「読んだ本について紹介する活動」は、教科書においてどのように取り扱われているのだろうか。新学習指導要領に対応する平成23年度から使用される国語科教科書において、低学年の読書紹介の仕方や読書カードの書かせ方は、次のようになっている。

#### ①1学年下巻の読書単元（東京書籍1年下）

- ・読んだお話を紹介するための「おはなしカード」を書く
- ・書名、著者名以外の項目は、「おもしろかったとこ

ろ」のみ

## ②2年生上巻の読書単元（東京書籍2年上）

- ・読書履歴を記録するための「お話カード」を書く
- ・書名、著者名以外の項目は、「好きなところ・面白かったところ」「好きなわけ・面白かったわけ」の2項目

平成23年度版の教科書において、自分の好きな本文の叙述を取り出し、その理由を書かせていることは、読書力と読解力との必然的な結びつきを保障するものとして、十分に評価できる。

しかし、教科書に取り上げられている「くまの子ウーフ」の「好きなわけ」は「ウーフが自分の毛皮をぬいで売ろうとするとところが面白かったです。」であり、「思ったこと」は、「でも、はさみで切るのは、いたそうでした。」である。「好きなところ・面白かったところ」と「好きなわけ・思ったこと」の関連性は乏しい。論理性、つまり「つなぐ思考」が十分発揮されているとはいえない。

確かに、低学年において、客観的な理由を論理的に書き切らせるのは困難を伴う。しかし、「どこが好きか」「それはどうしてか」という課題をもとに、「つなぐ思考」を行い、その結果を自分の考えとして出力させる学習に立ち向かわない限り、PISA型「読解力」を身につけることはできない。論理的に記述する力を高めることはできないのである。低学年は、低学年として「どこが好きか」「それはどうしてか」を書かせたい。

## （2）「つなぐ思考」を促す接続詞

論理的に思考するためには、論理を生み出す語彙を使いこなす必要がある。その鍵を担うのが接続詞である。接続詞によって「つなぐ思考」は活性化し、可視化される。

接続詞は、語句と語句、文と文のあいだの前後関係を明らかにし、論理に首尾一貫性を持たせるために使用される。因果関係、脈絡などを明確にする。従って、接続詞によって、文脈を使った推論の仕方が指示されることになる。しかも、接続詞の選択は、客観的な論理で決まるものではなく、書き手の主観的な論理で決まるものである。読み手は読み手として、接続詞を手がかりに、主観的な論理を作り上げる。それが「つなぐ思考」である。

石黒圭は、接続詞を大きく四つのタイプ、「論理の接続詞」「整理の接続詞」「理解の接続詞」「展開の接続詞」に分類している。（石黒圭、『文章は接続詞で決まる』、光文社、2008.9）

このうち、本論の対象となるのは、「論理の接続詞」

つまり、前後の文脈が条件関係によって関連づけられることを示す接続詞である。「論理の接続詞」は、既存の条件関係を下敷きにして理解されることによって、読み手における推論は限定され、文章の論理性や説得力が強化される。「論理の接続詞」は、「だから」「それなら」に代表される「順接の接続詞」と、「しかし」「ところが」に代表される「逆接の接続詞」とに分類される。この2種類の接続詞を意図的・目的的に使いこなすことが「つなぐ思考」を活性化させる。同時に、接続詞によって「つなぐ思考」は可視化されるのである。

本論では「つなぐ思考」を行うための方策を模索している実践として、兵庫県宝塚市立仁川小学校N教諭が行った小学校第1学年における実践を取り上げる。

## （3）「つなぐ思考」をふまえた感想を中核に

論者は、「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究」（環太平洋大学研究紀要第3号、pp.43-50、2010.3）において、読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫改善として、小学校低学年における絵本を活用した読解指導の有効性を確認している。その工夫改善のポイントは、次の3点であった。

- ・絵本の読み聞かせを継続し、多くの情報を与える
- ・お話の「つながり」をキーワードにすえ、お話相互の共通性に注目させる
- ・理由を書かせるワークシートを用意し、自分の考えを書かせる

特に、お話の「つながり」に注目し、お話相互の共通性について理由を添えて記述させる学習活動に重点をおいた。本論は、その延長線上に位置づくものである。絵本の積極的な活用をふまえ、お話相互の「つながり」を生み出す思考の仕方に焦点を当て、「つなぐ思考」として一般化することを試みた。つまり、前述したように、「読解力」「読書力」「表現力」の3つの力を相互に関連させ、同時に高めていく学習指導における改善の工夫を「つなぐ思考」に求め、その具体化を小学校低学年において行っている。

具体的には、自分の読んだ本について、「つなぐ思考」をふまえた感想を書くことを中核に据えている。つまり、筋道を立てて、根拠を示しながら、自分の考えを論理的に表現しようとする「表現力」としての感想である。

「つなぐ思考」をふまえた感想を書くためには、次のような場を設定することが有効であると考えた。

- ①絵本の読み聞かせと感想交流を継続する場
- ②「つなぐ思考」を促す接続詞を活用する場



### ③自分の感想を「お気に入り」としてまとめる場

「つなぐ思考」をふまえた感想を書くためには、物語全体を俯瞰することに加えて、物語の立ち止まるべきところに立ち止まり、読みどころを落とさない読む「つなぐ思考」を駆使した「読解力」と「読書力」とが求められる。このことを保障するのが、①絵本の読み聞かせと感想交流を継続する場の設定である。

また自分の感想であっても、他者に自分の思いや考えを分かりやすく伝える力が必要となる。つまり、筋道を立てて、根拠を示しながら、自分の考えを論理的に表現しようとする「表現力」が求められる。このことを保障するのが、②「つなぐ思考」を促す接続詞を活用する場と③自分の感想を「お気に入り」としてまとめる場である。

### ①絵本の読み聞かせと感想交流を継続する場

年間を通して読み聞かせを行う。絵本の読み聞かせは、作品全体を俯瞰することに効果的である。一学期のはじめは入門期に当たり、文章だけでは、お話をとらえにくい児童もいる。そこで、大型絵本を活用する。大型絵本は、視覚による情報量が多く、挿絵により登場人物の表情や動き、場面の様子をとらえることが容易である。そのことにより、抵抗なく話の展開を読み取ることができる良さがある。大型絵本から段階を追って、普通サイズの絵本へと移行させていく。

読み聞かせの途中や読み聞かせ後においては、子どもたちのつぶやきや発言に対して、意図的に対応するよう留意する。さらに、読み聞かせ後には、絵本の内容に関する感想を述べる場を設定し伝え合う場を持つ。感想を聞き合うことによって、子どもたちは他者の読み取り方と自分の読み取り方を比べることがでる。そして、他者との違いに気づき、他者の気づきの良さを取り入れることにより、自分の考えをはっきりと自覚しやすくなる。

また、読んだ絵本は、表紙の写真とともに感想として話題に上がった内容を簡単に書き込み、カード化して教室に掲示する。読み聞かせの記録として残すためである。カードの蓄積は、学習者にとっての読書履歴であり、読み聞かせによって得た情報を目に見える形に表したものである。蓄積された、読み聞かせリストの情報から、「つなぐ思考」を促す接続詞が抽出されていくことになる。

### ②「つなぐ思考」を促す接続詞を活用する場

読み聞かせを継続し、感想を交流する場を保証する

ことによって、作品の構造に関する論理的な思考が生み出され、作品そのものの理解も深められていく。そこに用いられるのが「つなぐ思考」であり、接続詞によって可視化される。取り上げる「つなぐ思考」を促す接続詞としては、1年生にとって無理なく使用できるものを選択する。具体的には、「順接の接続詞」の「だから」「おかげで」と、「逆接の接続詞」の「なのに」「けれど」である。もちろん必要に応じて、その他の接続詞の使用について制限することはない。

学習者の使用状況に応じて帰納法的に引き出された接続詞については、それらを整理し、リスト化する。その上で「つなぐ思考」を促す「論理の接続詞」を組み込んだワークシートを作成し、感想を書かせていく。このワークシートによって、学習者は、作品に織りなされた多様なプロットに関する理解についても深めていくことができる。

### ③自分の感想を「お気に入り」としてまとめる場

帰納法的に引き出された接続詞を組み込んだワークシートは、「つなぐ思考」が可視化されたものである。その段階で、ワークシートは「お気に入り」を内包する感想になっている。「つなぐ思考」によって、論理的に結びつけられた情報として、感想は表出されるからである。そこから、「つなぐ思考」が適用される場は多様に広がっていく。つまり、「つなぐ思考」は、読み聞かせの絵本だけではなく、教科書教材、さらには、日常生活場面や出来事についても援用されていく。日常生活や様々な学習場面における情報相互の結び付きが「つなぐ思考」によって意味づけられ、「お気に入りの出来事」「知らせたいこと」などとして、記述されることになる。「つなぐ思考」の汎用性は高い。

## Ⅲ 「つなぐ思考」を促す接続詞を取り入れた学習指導の実際

絵本を活用した「つなぐ思考」を強化する読解指導の工夫改善の例として、兵庫県宝塚市立仁川小学校N教諭の実践（1年生）を取り上げ、「つなぐ思考」に焦点を当てた分析を行っていく。

N教諭は、入学式から絵本の読み聞かせを行い、1学期には46冊の絵本を紹介した。2学期半ばの10月末の段階では、読み聞かせた絵本は70冊に達し、その取り組みは継続している。（資料①は、読み聞かせた絵本のリストの一部である。）

資料① 2010年度1年生 N学級 読み聞かせリスト  
1学期に読んだ本（抜粋）

01冊目	10-04-09	からすのパンやさん
02冊目	10-04-13	ねずみのでんしゃ
03冊目	10-04-14	しりとりのだいすきなおうさま
04冊目	10-04-15	ガンビーさんのふなあそび
05冊目	10-04-16	おばけパーティ
06冊目	10-04-19	じごくのそうべえ
07冊目	10-04-21	とべバツタ
08冊目	10-04-22	おばけのてんぶら
09冊目	10-04-23	にんじんとごぼうとだいこん
10冊目	10-04-26	すてきな三にんぐみ
11冊目	10-04-27	はらぺこあおむし
12冊目	10-04-28	おおきなかぶ
13冊目	10-04-30	にゃーご
14冊目	10-05-06	花さき山
15冊目	10-05-07	めっきらもっきらどおんどん
16冊目	10-05-09	たまごにいちやんぐみ
17冊目	10-05-10	すみっこのおばけ
18冊目	10-05-11	王さまと九人のきょうだい
19冊目	10-05-17	ちからたろう
20冊目	10-05-18	モチモチの木
21冊目	10-05-20	さんまのおふだ
22冊目	10-05-25	わんぱくだんのはしれ！いちばんぼし
23冊目	10-05-26	おじさんのかさ
24冊目	10-05-27	ねずみのかいすいよく
25冊目	10-05-31	くじらだ
26冊目	10-06-04	どうぞのいす
27冊目	10-06-07	おまえうまそうだな
28冊目	10-06-08	でんしゃにのって
29冊目	10-06-09	月ようびはなにたべる？
30冊目	10-06-10	999ひきのきょうだいのひっこし
31冊目	10-06-11	999ひきのきょうだいはるですよ
32冊目	10-06-14	くれよんのくろくん
33冊目	10-06-15	くろくんとふしぎなともだち
34冊目	10-06-16	せんたくかあちゃん
35冊目	10-06-21	こすずめのぼうけん
36冊目	10-06-22	そらいろのたね
37冊目	10-06-24	かたあしだちようのエルフ
38冊目	10-06-25	どうやってねるのかな
39冊目	10-06-28	ねずみのいもほり
40冊目	10-06-30	へびくんのおさんぽ
41冊目	10-07-01	どうやってみをまものかな
42冊目	10-07-05	ともだちや
43冊目	10-07-06	はんたいことば かくれんぼ
44冊目	10-07-07	おばけのバーバパパ
45冊目	10-07-09	スイミー
46冊目	10-07-13	ジャックと豆のつる

(1) 「つなぐ思考」を促す接続詞の可視化

読み聞かせを行った絵本に対する学習者から出された一言感想については、その代表的なものを、絵本の表紙と共にカード化し、教室に掲示していく。資料②

は、読み聞かせ1冊目の絵本「からすのパンやさん」のカードである。登場人物の名前が面白い、ストーリーとして消防車が大騒ぎする場面が面白い、といった素朴な一言感想が記録されている。

ところが、10冊目に読み聞かせた「すてきな三にんぐみ」（資料③）になると、一言感想の中に、「つなぐ思考」による接続詞が含まれるものが登場する。「なのに」によって、作品の面白さが語られていく。こうした感想は、自然発生的なものであり、学習者は無自覚に表出している。N教諭は、この一言感想における「なのに」を取り立て強調していった。「つなぐ思考」を促す接続詞を価値付けたのである。学習者は、「つなぐ思考」を促す接続詞を意識することになる。

18冊目に読み聞かせた「王さまと九人のきょうだい」（資料④）では、「なのに」「だから」「おかげで」などの「論理の接続詞」を用いた一言感想が表出されている。

こうした「論理の接続詞」を演繹的に教えた上で使わせるのではなく、学習者が使い始めた「論理の接続詞」を帰納的に取り立て際立たせていくところに、N教諭の指導の特徴がある。1年生が「論理の接続詞」を使いこなすという抽象的な思考を行うことができるという事実と、そのためには、N教諭のような帰納的

資料②  
「絵本の読み聞かせカード」  
10-04-09



資料③  
「絵本の読み聞かせカード」  
10-04-26



資料④  
「絵本の読み聞かせカード」  
10-05-11



な指導法が必要かつ有効であるという点に着目しておきたい。

絵本の読み聞かせの継続と、学習者による「つなぐ思考」を促す接続詞の活用が十分に行われた段階で、N教諭は、一言感想に共通する接続詞を整理し、資料⑤のような一覧表として提示した。「つなぐ思考」の仕方、「論理の接続詞」の使い方に関する活用表である。学習者は、こうした一覧表をもとに、さらに「つなぐ思考」を活性化させ、筋道を立てて根拠を示しながら、自分の考えを論理的に感想として表出することが可能となる。

## (2) 「つなぐ思考」の生きる「おはなしカード」

N教諭が作成した「つなぐ思考」を促す「論理の接続詞」を組み込んだワークシートは資料⑥のようなものである。上下の枠の間に「論理の接続詞」が書き込まれているだけのシンプルな構成である。学習者が「つなぐ思考」を自在に行うことができるように、あえてシンプルな構成としている。シンプルな構成であるが故に、その汎用性は高い。N教諭は、このワークシートを用いて、教科書教材「おおきなかぶ」の感想と、読み聞かせを行った絵本についての感想を書かせた。読み聞かせの絵本については、学習者にお気に入りの1冊を選択させて

資料⑤  
整理された「論理の接続詞」  
一覧表

おはなしかいて、  
こんなことをもったよ

◇  けど

◇  のに

◇  から

さいしよほ                      さいごほ

◇  だけど

◇  のおかげで

◇  のために

◇  けど  したから

◇  けど  のおかげで

資料⑥ 「論理の接続詞」  
を用いたワークシート[illegible]資料⑦ 「おはなしカード  
(おおきなかぶ)」例

「お好きな方」おはなレィード

7/5 田中 文 K・H


はじめてはおはじさんか  
たった(ナド)

はじめて  
の  
おはじ  
さん

はじめて  
のおかけ  
のために

はじめてしたから  
はじめてのおかけで

おはじさんがおは「あさ  
しとかちよんで」ちからさ  
あわぜようていうあいて  
あをたした(めろ)  
さいび「ぬけさよ  
かた。



いる。ワークシートは、「おはなしカード」として学習者に提示された。

資料⑦⑧は、「おおきなかぶ」の「おはなしカード」である。1年生として、この作品の感想の大半は「最後にかぶが抜けて良かった」である。注目すべきは、「かぶが抜けて良かった」につながる思考の道筋を、「論理の接続詞」を用いて生み出していることにある。どのような情報を抽出し、因果関係として結び付けていくのか、背後にある論理をどう読み解くかに、学習者の個性的な解釈が反映される。

資料⑨は、読み聞かせの絵本から選択された「お気に入りの絵本」に関する1学期末に書

かれた「おはなしカード」である。作品の構造を生み出す特徴的な事象を、読み手として自在に結びつけ、その因果関係を解釈している。

資料⑨の「すてきな三にんぐみ」は、読み聞かせ絵本の10冊目〈4月26日〉である。この「おはなしカード」を、前述した「読み聞かせカード」〈資料③〉と比較してみれば、「つなぐ思考」の深まりを十分に見取ることができる。「論理の接続詞」によって、学習者独自の「つなぐ思考」を見取ることができる。

### (3) 「おはなしカード」の質の深まりと汎用性

N教諭の絵本の読み聞かせは、2学期にも継続されている。学習者は、「つなぐ思考」をくり返すうちに、二者間系の背後にある論理について、さらに思考を深めていった。特に、因果関係を生み出すプロットにおけるメインアイデアの質に気づいていった。つまり、問題が解決される「メインアイデア」として、意外性の高い名案がある場合、登場人物同士の協力関係による

資料⑧ 「おはなしカード  
(おおきなかぶ)」例


「おおきななふ」おはなしかーど

7/15 西条 文子 B・R

おじいさんとおばあさんと  
まごとしねとあつと5人に  
でちからをあわせた「1人」

(け) だけど (き) ーけどーしたらー  
(あ) のおかげで (こ) ーけどーのおかげでー  
(ち) ーあつた

かひは、あんなかた  
のに  
あずみかてつなぐ  
さなへかいて  
かひがあつた  
(か) かつた  
おもいました



資料⑨ お話カード例（お気に入りの絵本）

「おきにいのえほん」おはなしカード

7/10 安永 文

M・R

箱の二番のお氣に入りは…！

すてきなさんになぐみ

さいしよはわるいどろぼう  
たった(1)と

けら  
のに  
から

だけど  
のおかげで  
のために

…けど…したから…  
…けど…のおかげで…

おんなのて(お)おかしで  
やさしいさんになぐみにな  
れた(わ)よかったです。



場合、特徴的な登場人物の形質に依存する場合などがあるということに気づいていった。

そうした気づきを受け、「おはなしカード」は資料⑩のように変化していった。「メインアイデア」の質を「コース」として位置づけているところに着目したい。資料⑩の「おはなしカード」は、1学期末のものと同様に、この段階までに読み聞かせた絵本の中から、一番のお気に入りを選択させ、書かせたものである。選んだ理由の「コース」を選択させることによって、「つなぐ思考」はより明確化している。

S 児は、主人公が「ちょっとおとなになったと思う」という感想につながる論理的な思考を、主人公の最初の状態から「けど」「おかげで」という「論理の接続詞」を用いていねいに展開している。「つなぐ思考」を促す接続詞が十分に活用されている。

さらに、「つなぐ思考」は、絵本の読み聞かせによる「おはなしカード」以外の生活や学習場面においても用いられていく。その一例として、生活科の学習「ゲームランドをひらこう」を取り上げたい。

「ゲームランドをひらこう」は、2学期の後半において、次年度入学予定の幼稚園や保育園の年長生を小学校に招き、楽しんでもらおうというイベントを、1年生が企画運営するという生活科の学習である。資料⑪は、そのイベントでのある特徴的な出来事として、イベント終了間際の幼稚園生の様子について、記録しているものである。ふり返り作文の主題文としての内容である。長時間にわたるイベントの中から、ふさわしい情報を取り出し、関連付けていくという論理的な思考が行われている。

#### 資料⑩ お話カード例（お気に入りの絵本）

#### 資料⑪ お話カード例（ゲームランドをひらこうー生活科ー）

#### V. おわりに

N 教諭の実践を例に、「つなぐ思考」を強化する読解指導において、「①絵本の読み聞かせと感想交流を継続する場」、②「つなぐ思考」を促す接続詞を活用する場、③自分の感想を「お気に入り」としてまとめる場の設定が有効であることを確認してきた。「読解力」と「読書力」とを関連させ、「論理の接続詞」を積極的に活用することによって、「つなぐ思考」は強化され、感想は論理的に記述される。同時に、「つなぐ思考」の道筋については、「論理の接続詞」の使われ方を辿ることによって可視化することができる。

そのいずれの場合においても、「つなぐ思考」の質がとわれることになる。

#### 参考・引用文献

1. 西尾実「国語学習への実践的指標」、『西尾実国語教育全集第7巻』、教育出版、P142、1975.10
2. 石黒圭、『文章は接続詞で決まる』、光文社、2008.9
3. 伊崎一夫「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究」（環太平洋大学研究紀要第3号、pp.43-50、2010.3）
4. 伊崎一夫「テキストを理解・評価しながら読む力を高める学習問題」『小学校国語科PISA型読解力向上の学習問題と解説』（小森茂編、pp.14-25、明治図書、2007）
5. 伊崎一夫「小学校国語科『読むこと』領域における学習指導の工夫に関する研究－伝え合いを重視した『本の紹介活動』を中心に－」（『言語表現研究』第23号、兵庫教育大学言語表現学会、pp.12-23、2007）
6. 伊崎一夫「〈小学校国語〉作品の内容や表現の特徴を理解・評価する力を高める単元づくり」『読解力』で授業をかえる』（田中孝一・小森茂編著、pp.56-63、ぎょうせい、2008）
7. 伊崎一夫「PISA型『読解力』の具体化－工夫改善における三つのポイント－」（国語教育研究432、日本国語教育学会編、2008年4月）
8. 伊崎一夫・阿部秀高編著『移行期からはじめる新しい国語の授業づくり』（日本標準、2009）
9. 伊崎一夫「論理的記述力を高める」『教育フォーラム46〈言葉の力〉を育てる』（pp.25-35、金子書房、2010.8）

（平成22年11月19日受理）

